

フォン・ザーリッシュの森を訪ねて

—森林美学の原点を訪ねる旅—

小池孝良（こいけ たかよし）

はじめに

森林美学の実質的な創始者、ハインリッヒ・フォン・ザーリッシュの「人工林の美学」の重みは、自らの森林経営を基礎に著している点に求められるであろう（喜屋武 2011）。文章には、林業実務者たちへの呼びかけが随所に見られる。森林美学を著した本質は、この呼びかけにあると私は考えてきた。すなわち「美の視点に立って森林を仕立てるならば、森林経営も誤り無く実施できる。美を目指すことで目的に適した経営が可能になるからである。」と。これらを達成するためには、次に示す4つの視点が求められる。

1) 美しい森造りを心懸ければ、技術的に合理的な森造りが可能になる。2) 美しい森を造る技術者が職務上の喜びを得るので、ますます美しい森造りが可能になる。3) 美しい森は、人間の心に豊かさや潤いを与えるので森が大切にされる。このことが技術者達をいっそう鼓舞する。4) 特に都市近郊では、美しい森を整備することによって人々に良い環境を与えるので、一層、美しい森が育まれる。

ザーリッシュの森林美学が我が国の森林管理へ与えた影響を紹介して欲しいと言う要請を、発祥の地・シレジア地方（現在のポーランド西部）のポズナン大学森林保護学科のビシュニスキー教授から頂いた。その中で、北海道と主に関西・中部地域におけるザーリッシュの思想の展開の概説と実践例を“今田森林美学”の継承者、伊藤精悟・清水裕子氏と共に紹介した（Koike et al. 2011）。このご縁で、変動環境下での日本の森林史の一端を述べる機会を得た。そして、予期していなかったザーリッシュの森の見学が実現した。既に10ヶ月以上の時間が過ぎたので、冷静に、彼の森を訪問した印象をここに紹介できると思う。

ポズナン森林文化センターの活動

ポズナンは、シレジア地方の中心都市だが日本からの直行便はない。ドイツ・ミュンヘンからポ

ーランド航空を利用し、乗り継ぎも含め札幌から約23時間後、ようやくポズナン空港へ降り立った。翌日、会場のポーランド森林文化センターへ到着すると、ヨーロッパらしいお茶会の出迎えであった。失礼ながら、もっと貧しい印象を持っていたが、領主の城跡を利用してできたセンターであることも手伝って、実に豊かな雰囲気であった。



2002年突風被害を受けた人工林

写真—1 突風害で壊滅的打撃を受けたポーランドの森（ポズナン森林文化センター展示写真から）

ポーランド森林文化協会が2011年に森林史を取り上げたのは、国際森林年への貢献がある。ロシア、旧東西ドイツ、日本とポーランドからは森林関係者だけではなく、文学部歴史学のメンバーが森林利用の歴史と有用性を論じた。この中で、ポーランド森林管理局の方からの「1930年ころ日本の林野庁のDakai（恐らく高井）技師がポーランドの森林管理の情報収集に来たことを確認したい」という申し出に驚いた。当時から国家百年の計は森林管理にあるという考えをドイツ・ポーランド圏に求めていたことを再認識した。

会議の間に、城跡（＝パーク：王侯が狩りを楽しむ林などの囲われた地、風景式庭園）を利用した森林文化センターの各施設を見学した。ザーリッシュの施業を理解するために、ここでの展示が意義深いことが、翌々日の現地検討会で明らかになった。まず、林業機械と作業法の展示会場では、伝統的な播種から保育までの流れと種多様性に富む森林造成の意義が説かれていた。樹冠部位からハチミツを採取する方法の展示に驚いた。そして、2002年の突風による被害写真の展示に（写真—1）、2004年の18号台風を思い出した。1990年代から風害などが増えたという。構内には森林文化センターの助言者である森林保護学の研究者であるグビアズドヴィッチ教授の指導が至る所に見られる。とりわけ天敵を重視する森づくりの方法

や彼の専門とする土壌動物に関する展示、ミニ動物園でのヨーロッパ・バイソンなどの飼育が目をついた。

ザーリッシュの森へ一心に触れるー

森の見学会へ出発する朝、ドイツの著名な先生方は正装に近いスタイルで現れた。ロシアの参加者と私は調査スタイルでの準備をしていたので少し奇異に感じた。その理由は後でわかった。

いよいよテキストでは何度も見たシレジア地方・ポステリンへ自動車 2 台で向かった。道中、平原を走り抜けたが、道路は両側を街路樹のような並木で被われていた。防風林だという。注意深く道路脇の案内板を見ていると、Postelin (ポステリン) の文字が飛び込んできた。何とも言えない高揚感を感じて写真を撮りまくっていたら、ビシュンスキー教授が、「これがザーリッシュの教会である」と紹介された。地主貴族(ユンカー)であった彼は領民とともに神に祈ったのであろうか(写真-2)。レリーフが新しく展示されていた。郷土の英雄として、ザーリッシュの没後 90 周年記念の国際会議が 2010 年に開催されたが、その記念である。彼の足跡が明確に示され、その思想を内面から評価した出版がなされた。



写真-2 ザーリッシュの教会

2008 年の Cook Jr. らの英訳本や記念誌上で何度か見たザーリッシュ記念公園の入り口へ到着した。そこには構内に植栽された 46 樹種の案内が掲げられている。一同で構内を見学しつつ、林道の開設具合(木馬道:ソリが滑りやすいように林道には石畳が造られていた)、「ザーリッシュの岩」と地元では呼ばれている林内の大きな岩とその装

飾としての役割の議論、ザーリッシュの住まいであった古城跡などを見学した。突然、主催者ビシュンスキー教授が大きな木の名前あてクイズを出した。10 月末でも緑の葉を残し、ごつごつした樹皮からハンノキ (*Alnus incana*) を当てることができて造林系の面目を保った。森林保護の分野の教授が編集した *Estetyka Lasu*(森林の美学)でも紹介されているヨーロッパアカマツの変奇木を見学し、出版を改めて祝った(Gwiazdowicz & Wisniewski 2011)。ポーランド語(英語の要旨付き)の本書は、絶滅危惧種の紹介や特徴のある景観などが記載された美しい辞典のようである。

続いて、私は全く予期していなかったザーリッシュの林内の墓地へお参りすることになった。出発時、ドイツの教授達が正装していた理由がようやくわかった。こんなことであれば、せめてネクタイくらいは用意しておくべきだった。途中、森林管理事務所へ寄って歓迎を受け、所長らが同行してきたが、この時に花束やランタン様のお参り道具を積み込んでいたのだった。



写真-3 ザーリッシュの墓標へのお参り

勧められるままにランタンをお供えする栄誉を頂いたが、何とも恥ずかしかった。「我々は林学者! ザーリッシュも喜んでいるよ!」とグビアズドヴィッチ教授は慰めてくれた。静寂の中で偉大な人物の魂に触れる一時であった(写真-3)。さらにオークの並木を見たあと、あの有名な遠近法をまねた林道開設の現場へ案内された(小池 2011)。80 才を迎えた著名なドイツ人教授達も大はしゃぎであった。

次に、林道開設にかかわるザーリッシュの技術に関連して、彼の師の 1 名でありベルリン近郊の



写真—4 ダンケルマン
(1870年頃) Milnik氏提供

あるエーデスヴァルデ高等山林学校の校長を務めた B.ダンケルマン(Bernhard Danckelmann)の影響が熱く語られ始めた。彼は森林経理学の基礎として「人工林と狩猟」雑誌の編集を行い、プロイセン(現在のドイツ北部からリトアニアに

接する地域)を中心とした森林管理を森林純収益説に立場から講じた(写真—4)。ここで、私へクイズ第2問があった。「エーデスヴァルデ高等山林学校で学んだ最初の日本人は？」との問いであった。幸い「松野礪と松野クララ」(小林 2010)を読んでいたこともあって、かろうじて Hazama Matsuno の名前を答えることができた。しかし、ここで、自らの基礎学力の不足というか、(林学の)国際社会の常識の重要性を改めて知った。

ザーリッシュの「人工林の美学」には、林道の開設方法について、林内の風景を重視した記載がされている(小池 2011)。森林美学の主眼は林内美であり、林道などすべてに向けられている。例えば、林道は臆病なシカを意識し、スピードを下げ、交通事故を避けるためにも緩やかなカーブにする、新しく開設した道には牧草を播いて早く緑を回復すると自然保護論者は安心するし、農家のご馳走であるイノシシがやってくる、とある。

一同が楽しみにしていたのは、オークの植栽を並木状に造成した場所の成長具合と絵画のように遠近法を採用して林道開設を行った場所の今日の状況であった。オークは林内装飾に役立つばかりではなく、木材としても利用出来るサイズに達していた。公園木を木材として利用することは、奈良公園周辺などでも行われている。

林道について、シュテルプの「自然林の美学」(2005)では、ザーリッシュの森林美学は、時に絵画のような森林にもまなざしを向けていることが紹介されている。その実例の1つが林道による奥行き感の演出である。林地の高低差と山頂部に近づくに従って樹高が低くなることを利用し、林道の幅を山頂に向かって狭くなるように開設した。

この結果、透視法(遠近法)と同じ効果が得られ、奥行きは、100 m 程度のはずが、相当な奥行きを感じさせることに成功した。その「技法」は今も健在であった(小池 2011)。続いて Johanna(ヨハンナ)の塔とされる見晴・狩猟塔へと移動した。

森の観察塔

ザーリッシュの父が造ったという狩猟塔へ一同は移動した。私とロシアからの参加者には、特別だそうだが、塔へ登ることが認められた。塔の中は狭いが、ザーリッシュも登ったのかと思うと感動のものであった。屋上からの眺めは、なんと、北海道大学苫小牧研究林の眺めとそっくりであった。おまけに、塔の近くの緑色の樹冠はニセアカシア

が優占していた。極めて複雑な思いであった。

このあと昼食と夕食を兼ねた会がポステリン近郊のレストランで開催され、ポーランドの郷土料理を頂き、感動の一日を終えた。絵画の一部を見るような森づくりの理由



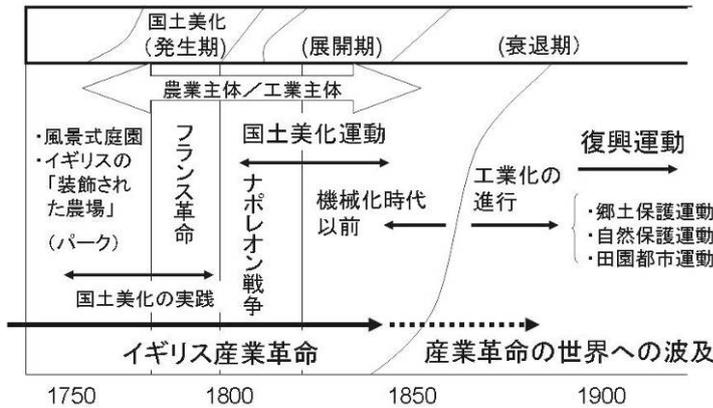
写真—8 Johanna の観測塔
ザーリッシュの父が 1850 年に建設。現在、Milicz 森林管理署が維持。

は、冒頭に述べたことだけではなく、当時のドイツの流れ「国土美化」運動にも目を向ける必要がある(赤坂 1991, 2005)。

国土美化と郷土保護運動

18 世紀には既に国土美化を進めていたイギリスの「装飾された農場(Ornamented farm)」の影響をドイツの美学者フィルシュヘルト(Hirschfeld, C.C.L.)は受け、ドイツ農村美化の取り組みの参考にした。農本主義であった当時の領主・フリードリッヒらは、土地改良事業として実践した。これは 18 世紀半ばから顕在化した荘園領主の改革、すなわち急激な経済変化によって

領主の役割が見直されようとする中で、領主としての立場を揺るがすことのないイギリスをはじめとする先進地での成功例をまねた改革を目指していたことを反映したと思われる（赤坂 2005）。



図一 国土美化運動の年代（赤坂 2005 を基礎に改作）

農村美化を実践したヴェアリッツ（旧東独）は、文豪ゲーテも訪問するほどの文化圏であった。パークの中には耕地が配置され「美と用の統合」というイギリス風の主張が生かされていたという。美しいパークは大部分が文盲であった領民への施しと見なされた。ナポレオン戦争後の 19 世紀初頭のバイエルン（独・南部）でも、国土全体を美しくし、「バイエルンを欧州のエデンにしよう」という国土美化がフォアヘルによって提案された。「国土の建設者＝領主」と同一視しており、国土開発を行ったことが彼の業績である。約 10 年で消滅したという（被支配者の）市民団体であった美化協会によって国土美化の考えは受け継がれた。Johanna の塔も展望台としての役割があった。この時代に活躍したピュックラー侯は、造園家としてもパークを造成した。その後、パーク造営の本来の手法（風景式造園）の限界が語られ始めた。

19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて、ドイツでは郷土保護運動が起こったが、ザーリッシュの活躍の場であった当時のドイツ東部からは、ロシア系ポーランド人を閉め出す運動などがあった。これが郷土保護運動の背景でもある。郷土保護を唱えたのは音楽家ルドルフであった。彼は経済偏重の耕地整理によって風景が損なわれる中で、「風景の破壊は精神にも害を及ぼす」と主張した。そして 1904 年にはドイツ郷土保護連盟がドレスデ

ン（コッタの開いたターラント高等山林学校の所在地）に開設された。この流れは欧州全体に広がった。この一環としてドイツのハイマート（≒郷土、ふるさと）運動も展開していった。この考えは後のナチスに利用されることになった（ふるさと→ドイツ人のふるさと→ドイツ民族だけの国家）。

私の理解では、産業革命が進展する中で安価な労働者として農民が都市へ移動し工業従事者となる中で、彼らの誇りを護りパークを享受させることによって、地主貴族達が進歩的な領主としての立場を維持するために、ハイマート・郷土美化の推進・創造者が産まれたのではないかと考えている。

郷土保護の中から身近な風景美を見いだすことが文化や記念物の保護へ向かった（赤坂 2005）。この流れが、広義の郷土（＝民族）を担う人材育成へと変貌していったと考えられる（識名・大淵 2005）。ザーリッシュの森林美学の根底には、経済の根幹が変わる歴史が明確に刻まれていると私は思った。

謝辞：貴重な機会を与えて頂いた D. グビアズドヴィッチ教授（ポーランド・ポズナン大学森林保護学科）と写真を提供頂いた A. ミルニック（Milnik）教授、貴重な資料を提供頂いた今泉宜子 Ph.D（明治神宮）に感謝する。

（北海道大学農学部）

引用文献

- 赤坂信 (1991) 森林風致計画学 (伊藤精悟編著)、文永堂、217-230.
- 赤坂信(2005)都市美 (西村幸夫編著)、63-81、学芸出版社
- Cook Jr. W. & Wehlau D (2008) Forest Aesthetic, FHS, USA
- Gwiazdowicz, D.J. & Wisniewski, J. (2011) Estetyka Lasu, Osrodek Kultury Lesnej w Gothuchowie.
- 喜屋武盛也 (2011) 日常性の環境美学 (西村清和編著)、125-150、勁草書房
- 小林富士雄(2010) 松野圃と松野クララ、大空社
- 小池孝良(2011) 北方林業 63: 261-264
- Koike, T., Shimizu, Y., Ito, S. (2011) Studia i Materiały Osrodka Kultury Lesnej 10: 47-62.
- 識名章喜・大淵知直共訳(2005)森のフォークロア [Lehmann A. (1999) Von Menschen und ihr Wald, Rowohlht Verlag]
- Stölb, W. (2005) Waldaesthetik, Verlag Kessel.